

「出雲の國・斐伊川サミット設立 10 周年記念事業スローライフ・フォーラム in 出雲の國」(2017 年 10 月 29 日(日)開催、於：出雲市「ビックハート出雲」)



～基調講演～

テーマ「結びあう 分ちあう」

神野直彦(日本社会事業大学学長・スローライフ学会学長)

この集いは出雲の國 斐伊川サミット設立 10 周年の記念事業でございます、私の方からは、出雲の國 斐伊川サミットを結成されている出雲市・雲南市・奥出雲町・飯南町の皆様方に 10 周年のお祝いを心より申し上げさせて頂ければと思っております。さらに、このスローライフ・フォーラムは、スローライフ学会の年次大会でございますので、この年次大会をこの地で開催させて頂くにあたって、ご関連の今申し上げました自治体の皆様方の一方ならぬご協力を賜りました。重ねて御礼を申し上げますと思います。

本日のこのフォーラムのテーマは「たたら文化・ふるさと創生一次の 10 年を考える」ということで、このパンフレットによると、スローライフという新しい視点でもって、このサミット圏域の 10 年後、これを見据えていく、考えていく、

ということでございます。私は「結びあう、分かちあう」というテーマで、お話しさせていただきますと思っています。

予め、筋道だけはっきり申し上げておくと、私たちが生きているこの時代では、人間の歴史が方向性を失って混乱している、ということです。これが第1番目の話。スローライフの視点からすると、この2市2町の地、たたら文化を象徴とする地域ですが、この地域の「たたら文化」というのは「結びあう、分かちあう」という文化だということができる。これが2番目の話ですね。それから3番目の話は、次の10年間で人間の歴史が混乱していますので、人間の歴史に方向性を与えて、そして、人間の歴史がこの閉塞的な状況を抜け出していく、その道案内人の役割を、この2市2町が引き受けるべきだというのが、最後の結論でございます。

「結びあう、分かちあう」というこのテーマを川島さんがお考えになったひとつは、いうまでもなく出雲大社が縁結びの神であるということにひっかけているわけですね。私のうちは祖父の代まで神々に使えていて大黒天、大黒様を信仰していました。日本で大黒天と大国主命の区別がつかなくなって合体していますので、私が何をやらされたかという、小さいときから大黒様の大きい像が家にあって、耳を触り耳たぶを大きくさせられたんですね。その大国主命を祀る出雲大社ですが、結びあうということは人間が生きていく上で、温かい手と手をつなぎあって生きていくものだ、そしてこれは男性と女性ということだけではなく、友情とか様々な意味での仲間を作りながら生きていく、仲間を作っていくことが結びあうことだと思えます。

もうひとつの分かちあいの方は、悲しみを分かちあうという意味ですが、こちらの方は私が書きました『分かち合いの経済学』という本がございます。今から10年前に書いたんですが、ここで雲南市の大東町の海潮地区をかなり詳細に紹介しています。「海潮っ子ランド」と呼ばれる保育園を見に行きました。そこは地域コミュニティが運営しているんですね。これ、感動しました。

私が先ほどご紹介して頂いたように地方財政審議会の会長をやっていますね、限界集落を見に行けといわれたんですね。中国地方はわりと限界集落が多くて、雲南市の限界集落を見に行ってくれと。ところがそこには地域コミュニティが息づいていて、自治会とかPTA協議会とか消防団、商工会、さらには農業協同組合、カラオケクラブみたいなものから全部集まりながら、市民組織が結集していた。つまり住民組織を組織化していて、そこにいわば地域振興行政組織みたいなものができ、かつ評議会、議会も作ってですね、小さなそもそもの政府の様な機能をする組織を立ち上げて、保育園だけではなく、人間が生まれ、育ち、老いていく、そういう包括的な生活機能をコミュニティを通じてみんなで行っていく、ということでした。下からの意欲があふれ出ていることに、感動しました。

さらに感動したのは、日本の場合には地域を発展させるには、その地域に住んでいる住民はその地域の良さがわかってない、他の地域からやってきた人がそれを見つけて、他の地域の人に頼るしかないんだ、という抜き差し難い信仰があるのですが、ここは全く違っていました。私が取材した時のリーダーは、転勤とかありましたけど基本的にその海潮地区の生活文化の中で自らを作り上げた方なんですね。その人がリーダーとしてやっている、これにも感動しました。

世界の様々な地域が発展していく過程を分析している開発経済学によると、草の根のリーダーシップを育てるのは、コミュニティそのものだといいます。他の地域からやってきた人は、その地域を発展させることは短期的にはあり得ても、長期的にはあり得ないというのが結論です。その地域の問題点、その地域の生活様式、それが身についている人しか無理なんですね。つまりリーダーシップを育てるのも、そこのコミュニティだ。そういったことがここは息づいておりまして、私はそれに感動して本に著したのが『分かち合いの経済学』ということになります。

ただ、日本では私の本はあまり売れないんです。今日お持ちしたこれは韓国版です。これが爆発的に売れた。あのセマール号がひっくり返った事件からです。ご存知の通り、船長さんからみんな非正規従業員だったわけですね。韓国の人々は、今までは成長成長、効率効率とやってきたんだけど、「これはちょっと間違えたんじゃないか、肝心なことを忘れたようだ、それは人間の命だ」と反省をして、その手がかりとして私の本で「共生社会」というのを目指そうということになった。「ハンギョリ新聞」から、これは市民が出資して作った新聞なんですけど、そこで国際的なシンポジウムを、共生社会ということでやりたいから来てくれ、といわれました。

私は海外が嫌いなのでお断りしてたんですね。そうしたらそのハンギョリ新聞が1面2面で特集をやりたいからという。その後、今度は韓国大使館から、講演に来て指導してほしいと。何でこうなるのかを聞いたら、「あなたの本の後ろに印刷されているのが“推薦文”です」と。推薦文を誰が書いているか、ソウル市長が書いているんですね。市民運動の指導者として市長になったパク市長が私の本を読んでいる。「市長は本に書いてあることを、政策として実際に移しますよ」と仰るんですね。韓国大使館の説明によるとこれ『分かち合いの経済学』というタイトルがついてたのかと思ったらそうじゃなくて、『分かち合いの経済学がやってくる』というテーマになっているそうです。私の本をソウル市長は適切に要約して頂いた上で、最後に「他人が幸福になることが自分の幸福なんだ、という風に考えるすべての人とこの本を分かちあいたい」と書いてあるんですね。ということで、韓国ではこの地域のことは良く知っているわけです。韓国では皆さんが、読んで頂いてますから。さらに、出雲市はいうまでもない。こう

ということが息づき、そもそも運命共同体をつくるための結びあうという神様が
いるところなのです。

私は、毎月1回は奥出雲の仁多米を食べています。なぜかという銀座で私が
食事にいくところが決まっています。そこに行くと「これ、奥出雲の仁多
米です」と出してくれるわけですね。私が地方分権改革推進委員会のことをやっ
ていますが、そこにいる方の縁で松江料理を出すお店へ行きます。そこで必ず奥
出雲の仁多米を使っています。また奥出雲はたたら文化の地ですので、鉄を動か
すのにどうしても計算しなくてはなりませんから、雲州ソロバンが生まれた。私
の知識に間違いがなければ、ソロバンの製作過程でたたら、つまりふいごによっ
て回していく技術が生かされているはず。そういう奥出雲、さらに飯南町の
町長には日頃からご指導頂いておりますが、飯南町もこれは今や有名な、下から
の住民組織を様々に使いながらやっている町ですので、「結びあう、分かちあう」
というような現象面からいっても、それが活着している場所だということをお話
しさせて頂きました。

それでは「結びあう、分かちあう」の分かちあうの解題になるのですが、今、
人間の歴史が方向性を失っていることからお話しさせて頂ければと思います。
人間の歴史は皆さん、身をもって感じていると思いますが、混乱しています。世
界を見渡せば、憎しみと暴力があふれ出ている、こうって良いかと思います。
格差社会といわれていたんですけども、格差が背後にあることは間違いありま
せんが、不安、未来に対する不安が充満している不安社会になっている。なぜこ
うなったのかという原因は、誰もが分かっているはず。

これはいつも申し上げていますが、ギリシャ悲劇の舞台になっているギリシ
ヤの都市テーベで未知の病が流行って、市民がバタバタ死んでいってその恐怖
におびえているとき、その市民は未知の病の原因は誰もが分かっていました。そ
れは何か、コミュニティの崩壊です。今世界に暴力が、憎しみが溢れ、そもそ
も大国の大統領が、憎しみと暴力を煽っている状態ですので、憎しみと暴力が溢
れる社会になっている、これも原因は誰もが分かっているはず。コミュニティの崩
壊です。

イスラムの伝統的な共同体が崩壊してしまう、という恐怖感が暴力的な形態
をたどって、ISとかですね、そういう宗教的原理主義を生み出している。一方
でそういう流れを受けながら、先進国の方に目を向けると、イギリスのEU離脱、
ブレグジットが。このままEUに留まれば国境管理が手薄になり、イングランド
の伝統的なコミュニティ、共同体が崩されていく、という恐怖感から離脱する。
と、こういう風になっているわけですね。さらにトランプ大統領を押し上げてい
る背後にあるものは、アメリカにおける伝統的な白人を中心とする共同体が、こ
のままいけば崩れ去ってしまうという恐怖感を煽りながら、空疎な雄弁による



大衆操作をやろうとしている。こういう風について良いと思いますので、国家主義が、一方で宗教的な原理主義が台頭するとともに、他方で国家的原理主義が台頭しているという状況に、私たちは生きている。

この状況の下で、これはローマ法王の世界に向けた「回勅」にも出てくるのですが、知らないうちに

2つの環境破壊が起きているということです。ひとつは自然環境の破壊。ローマ法王は「人間はまだまだ不十分だけど、ようやく人間の命を育ててくれる自然環境の破壊の恐ろしさに気づき始めた」と。もうひとつの環境破壊は人的環境の破壊ですね。「人間はそもそも、温かい手と手をつなぎあって、コミュニティを形成して生きていくものなのに、それが崩れさっている、この事実にはまだ、気付いてさえいない」と警告をしています。先ほども申し上げましたように、現在の不安社会の背後にあるのは、人間の結びつきが弱くなったのではないか、家族やコミュニティの絆が弱くなったのではないか、という恐怖感。一方で競争に駆り立てる様に、まるで闘技場を待っている剣闘士のように進もうとしている。その恐怖感が実はさまざまな憎しみや不安をあおりながら、憎しみや暴力を生み出しているといっただけかと思えます。

そこで今、ヨーロッパをはじめとして考えていることは何か。私たちがこれまで生きてきた社会は工業社会なんですけども、この工業社会でやってきたことが、行き詰っている。するとこれからの社会は脱工業社会、工業社会から脱するものを作っていかななくちゃいけない。その時の導きの糸は何かというと、近代以前にあったものです。これを同じ形では復活できませんので、近代以前に存在していたものを、新しい状況の下で再創造しようということです。本来の「ふるさと創生」というのは、これから始まる工業社会ではないポスト工業社会、これはヨーロッパは知識ベースといっていますので、知識基盤社会、あるいは知識社会というようにいわれる時代に合うような形で、地域社会を再創造しようというのが、本来の「ふるさと創生」の狙いのはずです。

ヨーロッパの地域再生の合言葉は、「レジリエンス」とそれから「ポリセントリック」ですね。「ポリセントリック」というのは、近代以前がもっていた、地域の多用な結びつきを残していこうという、復活させようという運動です。近代社会になると中央に中央にとパーッと結びついちゃうんですが、もともと近代以前では、放射線上に地域間の結びつきがあったわけですね。それが失われて日

本もみんな東京へ東京へとなくなってしまった。岩手県なども本当は沿岸と山側と、いくつもの道があったのに、近代化するとみな東京に行く道になってしまう。津波でやられてしまうと、利用できるのは近代以前からあった道、山から攻め込んでいくということをやらないと救済できない、そういうことになるわけです。そういう「ポリセントリック」をやるのが、「レジリエンス」です。これ、なんで日本は「強靱化」と訳すのか分からないですが、あれは「粘り腰」とかですね「柳腰」とかと訳した方が良いと思うんですが、つまり上手く強く対応できるような力になるのだ、ということです。

そして私たちは、次の新しいモデルがどこから生まれるのか、誰もが分かっていますね。これまでの人間の歴史は周辺革命といわれているように、その前の文明が栄えたところの周辺から次の文化が生まれるわけですね。その前の時代の文明が栄えたところでは、どうしてもその文明の論理に至ってしまうので周辺から出てくる。工業社会の周辺部から、次のモデルは必ず生まれてくるわけです。

さて、ここのテーマであります「たたら文化」とは何か、といえは前近代つまり工業社会になる前のものづくり、文化、生活様式であり、それは繰り返し様々なところで説明されていますけれども、近代の工業社会のように、死せる自然を利用してやっていくのではなく、生きとし生ける、川、山、それと人間の命をいかに結び付けるかという産業方式ですね。川が流れて来て運んでくれる良質な砂鉄と、それから豊かな緑、これとをいかに結びつけて循環させていけるか、循環型の作り方、つまり近代以前が作り出したもの、これを再評価して新しい状況の下に作り出していこう、そこに私たちにとっての次のモデルのヒントがあるということです。

「スローライフ運動」とは何か。これは近代以前にあったそのものを、もう一度新しい次の時代に再創造しよう、という運動だと申し上げて良いかと思いません。自然のリズム、生命のリズムに合わせながら、生きていくこと、これがスローライフだと。つまり人生をファストで走り抜けるように生きるのではなくて、道に咲く花を愛で、行きかう人々と会話を交わしながら生きていく。これがスローライフですね。スローライフを始めた筑紫哲也がいつもいていたのは、「私たちのスローライフ運動はイタリアのスローフード運動からはじまるんですよ」と。

これはアメリカがグローバリゼーションによって押し付けてくるファストフード、つまりハンバーガーなんかのファストフードですね、これに対するものです。ローマのスペイン広場にファストフードの第1号店ができるとき、それに対して「冗談じゃない、イタリアにはイタリアの伝統的な生活様式に基づいた“食”がある」といって、それを开店させないようにというのが、最初のスローフード運動です。その運動が破れて第1号店が开店してしまうのですが、ローマのすぐ

そばにあったブラという町の人が、反対運動をこれからも続けようとした。自分たちの運動はファストフードに対抗する運動だから「スローフード運動」と名付け、その本部をブラという町に設けたんですね。

筑紫哲也がイタリア、ジェノバで開かれた大会に行き、そのブラのパンフレットを見てびっくりしたと。そこには「私たちはゆっくり食事をし、ゆっくり生きています。町の教会の時計も、時間を正確に刻んでないかも、止まっているかもしれない。それでも良かったらどうぞブラにお越し下さい」と書いてあった。行ってみると5つある教会の時計は、一応は動いているけれども、12時には、違う時に全部なり始めた。正確ではなかったということですね。けれども筑紫哲也はそれを見て「フード、食だけではなくて、すべての人間の生活様式、すべての生活文化にこれを発展させよう」ということで、スローライフ運動を興しているわけです。

従って、スローライフ運動というのは、近代になって失われようとしている近代以前の中の良いところを見つけ出して、これから工業社会ではなくなるので、次はどんな社会かといったときに、もう一度それぞれの地域社会が持っている、前近代的なものの中に、発展させるべきものを見つけ出して再創造していかうと、それがスローライフ運動だといっていい。私たちが生きていく上で重要なことは、工業化によって打ち砕かれてしまった自然環境と人的環境を、もう一回取り戻そうということになるかと思えます。

工業が鉄を作る時に何をやるのか。自然破壊的に鉄鉱石を取り出すわけですね。しかもあと使うのは、「強粘結炭」といわれている固い石炭を使うわけです。石炭は、ジュラ紀にこの地球上に生えていた草木が地中の中にCO₂を抱え込んで潜っているもの。それをまた暴き出してCO₂を出そうという、いわばストックとして抱え込んでいるものを出していくわけですね。石油にいたっては、古代生物の死骸の脂のはずですから、死せるものに対して祈りをささげることも無く、使っていくわけですね。

たたら文化では祈りを捧げます。私は10年間、自動車工場に勤めていましたけれども、自動車工場は流れ作業になっていますから、どこかが止まると全体を止めなくちゃいけないんです。そうすると、刀鍛冶と同じ製法で作っていく鍛造工場は、11月8日になると止まっちゃうんですね。これはふいごの神さまをお祭りするためです。鍛造工場に勤めている人たちは、「動かしたらあとは人が出て大変なことになるから」といって、11月8日に止めるんです。

私たちは山、川という自然資源と上手く組み合わせていく。山の幸と川の幸、たたらは良質な砂鉄と豊かな森林の恵みとを組み合わせるわけですが、そのポイントがふいご、足ふみ方式の大型のふいごのことを「たたら」というので、それを象徴させるようたたら製鉄と呼ぶ。川、山と、人間の生活を結び付けていく、

循環型に、それが「たたら文化」ということになる。

棚田も同じことですね。そういう地から棚田が出てくるのは同じことです。田んぼはご存知の通り、畑と違って何年使っても自然を破壊することはありません。畑はダメですね。持って40年、連作による被害が出て来てしまっ。ところが田んぼは大丈夫です。今、世界で最も古い水田はインドにあります、8000年持っています。何で持っているのか、これは水ですね。水を回すんです。この水を回すポイントは何か、それは森です。森が水を抱いてくれていて、それによって回せるからですね。

ヨーロッパの考えでは、理想郷、ユートピアに人間は生きているうちには行けない。ところが東洋の思想では理想郷のことを桃源郷といいます、これは行きます、私も行きました。ここら辺と同じ風景になっています。中国には珍しく、中国ってあんまり木が生えて無いんですけど、森林があってですね、ミャオ族という苗の族と書く族が住んでいて、きれいな棚田になっている。ところが行くと森を伐ろうとしている。伐ったら棚田がダメになるのに。誰が伐っているのかなという、日本の商社が割り箸をつくるのに伐っていたりするんですね。つまりともかく、森、水、これは結び付いて、私たちは田んぼで動かしていく。

分かちあいといったとき、これは、悲しみの分かちあいですよ私は申し上げます。それは、悲しんでいる人と悲しみを分かちあうと、その悲しんでいる人だけが救われるのではなく、悲しみを分かちあった人も救われるんだと。なぜなら人間が生きているときの幸せ感というのは、他者にとって自分の存在は必要不可欠だと認識したときなので、不幸にくれている人と苦勞を分かちあえば、その人の存在、つまり分かちあった人の存在が自分が他者にとって必要不可欠な存在なのだとして認識できるはずなんです。

これは、私はキリスト教の精神をいっているのではなくて、日本の精神をいっています。「三福田」といって、田んぼは幸せを生み出すところです。稲を生み出すところではありません。三つの福田、ひとつの福田は「敬田(きょうでん)」、尊敬するの敬に田んぼですね、これは仏とか僧侶とかという人を尊敬すると、田んぼというのは幸せを生み出してくれますよということです。もうひとつは「恩田」。恩を感じるの恩に田んぼ、これは父母の恩、これに報いるとその人は幸せになる、その田んぼから幸せが生まれてくるということです。もうひとつは悲しみの田んぼ、



「悲田」。これは悲しんでいる人と悲しみを分かちあって、その人に慈悲の心、慈しみの心をするとその人が幸せになるんですよということ。悲田、悲しみの田んぼと書いたときには、悲しみを分かちあう、手を指しのべることによって、自分が幸せになっていく。これは人の付き合い、私たちが今、どんどん失おうとしているものがこれから取り戻せるかどうかです。

この出雲の國には、非常に良いのは現代人が忘れている祈りが残っているということです。神秘性がある、神社がたくさんある。つまり豊かな自然と、その自然と共に生きるという共生と、もうひとつ自然と一緒に生きる時に、人間同士の手の繋がりが、この地にはまだ残っているということです。今日の舞台に活けてあるお花にアジサイがあります。さきほど活けて頂いた女性の方が今日のために目を付けていたおうちの庭からもらおうとしたら、おうちの人居なかった。困っていたら、近所の人「私が親戚だから大丈夫」ということで、花を頂けたということです。そういう繋がりがないと、いくら目を付けていても花は取れないわけです。つまり繋がりがあある。そういうエコロジカルな発展、人間と自然とが生きている自然、死んだ自然ではなく、生きている自然の川と山、それを基礎にしながら、地域社会を発展させていくということ、コミュニティが草の根から作られている、そういう動きがここにある、これは分かちあいの心なんですね。

先ほどもいいましたけれども、草の根のリーダーシップは、必ずコミュニティが作ってくれます。コミュニティが作り出さないと意味がないんですね。リーダーシップというのは、黙って俺についてこいというのはリーダーではありませんので、オーケストラの指揮者のように、それぞれのパーツパーツが不協和音を生じないように、タクト、指揮棒を巧みに振ることです。そういうものを作っていく、いわば運命共同体を作っていくための、縁を結ぶのが結ぶことであり「結びあう」ことであると。これは悲しみを分かちあうことによって幸せになりました、悲しみを幸せに変えるということが、縁を結ぶという行為だといえるだろうと思います。

最近学生に「愛する」とはどういうことかと、講義しないと分からない、愛することが分からなくなっているんですね。愛するというのがどういうことなのか、デパートで商品を買うように、お買い得な買い物をするような感じで人を選ぶのに結び付けるのではない、こういう講義をしないと、教えないと愛することができないような状態になっています。愛することをもっともよく教えてくれるのは、サン=テグジュペリの『星の王子さま』だと思います。

星の王子さまが狐と出会って、狐に「僕と友達にならないか」と誘われて、縁を結ぶ、狐と友達になる。狐と友達になるのはどういうことなのか、ここがそのまま読むとこういうことですね。狐と友達になるのですが、星の王子さまは狐と

お別れしなくてはならなくなる。お別れをする時に「そんなことというと僕泣いちゃうよ」という、「それじゃ何にもならないじゃないか」という、「いや、そんなことないよ。小麦色の麦畑を見ると、僕は君の金髪を思い出して、君のことを思い出すから全然違うんだ」という。こんなことをいった上で、秘密を狐が王子様に教えることになる、そこを読みます。「秘密の話をする。これは何でもないことだよ。心で見なくちゃ物事は良く見えない、ということさ。肝心なことは、目には見えないんだよ」これが重要なんですね。「あんたがバラの花を非常に大切だと思っているのは、その花の為に時間を費やしたからなんだよ、だから大切なんだ」と、こう教えているわけですね。狐はこういいます。「人間というのは、この大切なことを忘れていたんだ。だけどあんたはこの大切なことを忘れちゃいけないよ。面倒をみる相手には、つまり友達になったり縁を結んだりする相手には、いつまでも責任があるということだ」と。

つまり愛するとは何かということ、責任を引き受けるということ。相手の人生、生きることに対して、責任を引き受けることが愛するということだというわけです。つまり縁を結んで仲間になる、運命共同体をつくる、運命共同体をつくるというのは悲しみも喜びも同じになるわけですから、責任をとるといふことなんだということです。私たちは「結びあう」あるいは「分かちあう」ために、時間を費やさなくてはならないんですけど、これを現代人は忘れようとしている。友情に割く時間や、愛情に割く時間を惜しんで金儲けに走ったりしているわけですね。これは幸せとはいえません。

統計によると日本人は、友情、友達関係で時間を費やすのが、世界で一番少ないんですね。隣人との時間も少ない。家族との時間が多いからといっていたんですが、これも色々調べてみると、危なくなっている。だんだん日本の家族機能もダメになっています。そういう社会はどうかということ、日本の社会は「無縁社会」ということになります。無縁社会の象徴は、ごみ屋敷と孤独死。孤独死が悲劇的なのは、人間が生物として死んでいく前に、心が死んでしまうんですね。つまり、自然死、自然の肉体死の前に心が死ぬという悲劇を味わっている。

私は今後の10年間で、この地域が育んできた、「たたら文化」を開花させなくてはならないと思います。今、世界でもその道筋は見えてないんですけど、少なくとも分かっていることは、工業化をする前の文化を再評価して、その中からポスト工業化社会の在り方を考えていかななくちゃいけないということです。「たたら文化」というのは、その象徴なんですね。近代的な製鉄法が入ってくる時に、たたら職人はいっているんですよ。「そんな製法じゃだめだ、こちらの方が優れている」と、それくらい自信をもってやっている。そういう文化が育んでいる生活様式を、脱工業化社会では、次の社会ではですね、それをもう一度創り出すことです。

私たちは混乱した時代を生きていかなくちやいけないんですが、その時に希望と楽観を携えて生きていこうとすれば、2市2町のいわばこれからの10年間の動きにかかっているといってもいい過ぎではないと思っております。アメリカインディアンのシアトル酋長の有名な言葉は、ご存知の通り「最後の木を切り倒した時に、人間はやっと気が付くだろう。お金は食べられないということ」です。この地域の特色、「たたら文化」の本質は「結びあう」それから「分かちあう」ことだ、そして「結びあう、分かちあう」ということが、今、失われようとして、破壊されようとしているので、世界は、人間の歴史を喪失するような混乱状態にある。したがって誰が道案内、導き星になって次の時代に光をともしかといえ、ここの出雲の國の2市2町にそういう使命があるのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。

